

蘇舜欽の書の評價をめぐって

——歐陽脩との交遊を中心にして——

大 森 信 徳

(一)

書にとって宋代は如何なる時代であつたかを概括する際によく引かれるのが、周知のように「晉人は韻を取り、唐人は法を取り、宋人は意を取る」(『容臺別集』卷四)という董其昌の見解である。すなわち、その特徴は個人の〈意〉の取るところを示すこと、即ち人間の精神性の重視によって、書の技巧に關することは必然的に第二と見做されるようになったことである。

それでは、この「意」を感得するか否かを決める主たる基準は何かと問われれば、從來ほとんど問題視されてこなかつたように思われる。ただ印象的に曰く言いがたい「意」があることを作品に認めるにとどまり、具體的かつ明確な説明が

示されないままに來た経緯があるときえ言える。これに關して、筆者は人物の経歴、人間關係、そこから生まれる風評などの、藝術そのものにとつては副次的ともいえる社會的要素が評價に少なからず關わつていのではないかと考える。なぜなら、鑑賞者が制作者の「意」を感得するには、その人間の内面を理解しない限り、けつして一つの作品としての個性を知り、それが志向する美を知ることではないからである。

宋代より書藝術の主體が行書・草書に移ることで、線質の變化や躍動感などが紙面に遺憾なく表現されるに至る。それに伴い、鑑賞評價の主たる基準が「意」すなわち人間の精神性が重視されるようになる。しかし、このことが上述したように、さらに踏み込んで、書の評價が士大夫集團の在り方と複雑に絡み合いながら存在していることについては、從來看

過ぎられてきたように思われる。また、宋代書論の評価の在り方を概観すると、その關係がそれ以前の時代よりもより顯著な形で現れている印象さえ受ける。

その周邊の事情を明らかにすべく、本稿では、親交を結んだ歐陽脩によつて高く評價された蘇舜欽の書を取り上げて、歐陽脩がいかにその書を捉えていたのか、彼の書壇での立場にも目を配りながら考察を加えたいと思う。また、別の視點から見れば、それを通じて、當時の文人同士の文化的生活が如何なるものであつたのか、その一端を知ることにもなると思われる。

ただし、ここで斷つておきたいことは、もちろん書に内在する純然たる藝術性が人々の心を感動せしめ、評價につながることを蔑ろにするわけではない。個人の内面を表出する書が北宋より現れ、かかる評價にもそのような風潮に伴つて人間のあり方が問われるようになり、藝術作品の價值および評價の究極的な根據を作品内部に求めるだけでは、書藝術に對する本質的な理解にはならないことを提起しようとするものである。

(一)

蘇舜欽の書の評価をめぐつて（大森）

蘇舜欽（一〇〇八—一〇四八）は、北宋中期の文人であり、字は子美、號は滄浪翁。先祖は四川の銅山の人であるが、後に開封に移り住んだ。祖父の易簡、父の耆、兄の舜元など累代官僚の家に生まれ、唐、五代以來、四代にわたつて宰相を出した名門である。景祐元年（一〇三四）の進士である。官は大理評事となり、しばしば天子に上書し意見を進んで具申した。范仲淹に推薦され集賢校理となり、進奏院を監督した。母は眞宗期の宰相王旦の女、妻は仁宗期の宰相杜衍の女である。杜衍・范仲淹が改革を試みるも、反對派の御史中丞の王拱辰の策謀によつて陥れられた。これが慶曆四年十一月に起つた「奏邸の獄」である。范仲淹のグループの一人であつた蘇舜欽が、たまたま進奏院で神を祀る行事があり、後で恒例の宴會が催されたが、その資金を公文書の故紙を賣却することと捻出していたこと、さらに妓女を召して羽目をはずした態度が弾劾された。蘇舜欽と劉巽は、「自盜（自ら監督する倉庫の品物を盗む）」の罪名で官位を剝奪され、宴會に参加した十數名の改革派や少壯の官僚たちが中央から一掃されてしまった。「二網盡之」（一般には「二網打盡」で知られる）の語は、この事件に由來し、李燾『續資治通鑑長編』および『宋史』には王拱辰の言としている。失脚後に蘇州に滄浪亭を築いて自適の生

活を送り短い生涯を終えた。歐陽脩・梅堯臣らとともに宋詩の確立に貢献し、書ではとくに草書に優れ、兄の蘇舜元とともに好評を博した。⁽¹⁾

件の獄に對する處遇は、後述する歐陽脩を始め、世間の目には酷なものとして映っていたようである。しかし、朱熹などは「雖是拱辰、安道輩攻之甚急、然亦祇這幾個輕薄做得不是。縱有時名、然所爲如此、終亦何補於天下國家邪」(『朱子語類』卷二一九)と言い、倫理的ありかたを重んじるがゆえに、蘇舜欽が政治的畫策によつて陥れられたことについてはいささかの酌量の餘地も與えていない。これについて、王夫之は『宋論』卷四において、妖言は春秋時代より漢・唐を通じて絶えることはなかつたことを述べ、ことに宋代に至つては苛酷な情況にあつたことを實例を擧げて論じている。王拱辰が蘇舜欽を陥れたことに續いて、丁謂は寇準に引き立てられ參知政事まで昇進するも面子をつぶされたことを恨みに思い寇準を失脚に追い込み、その後宰相に就任したこと。韓琦や歐陽脩を中心とする中書派と司馬光を中心とする臺諫派が濮王の處遇をめぐり對立していた時期に、蔣之奇は始め恩人である歐陽脩の辯護に徹していたが、中書派の形勢が不利になると、自らの地位を心配して歐陽脩を彈劾し失脚を謀つたこと。そ

のほか、夏竦が石介及び富弼を陥れたことを例に擧げる。

(三)

まず蘇舜欽の書に關する評價を概觀してみることにする。總じて蘇舜欽を高く評價するものは以下の通りである。

○宋の歐陽脩『歐陽文忠公集』卷五「和劉原父澄心紙」

君不見、曼卿子美眞奇才、久已零落埋黃埃。子美生窮死愈貴、殘章斷稿如瓊瑰。：自從二子相繼沒、山川氣象皆低摧。君家雖有澄心紙、有敢下筆知誰哉。

○宋『宣和書譜』卷一一

作字沈著、而精神充實、尤工行草。評書之流、謂入妙品。當時殘章片簡、傳播天下。美其文翰者、有花發上林、月澗淮水之語。兄舜元善篆隸、亦工草字、書名與舜欽相前後。蓋是下筆處、同一關紐也。

○宋の朱長文『續書斷』

尤工行押、草書、皆入妙品、殘章片簡、傳寶天下、如花繁上林、月晃淮水、光彩浮動雲。兄舜元字才翁、草書卓爾不群、但恨遺蹟之少。

○宋の陸游『渭南文集』卷一五

文如師魯、書如蘇子美、詩如石曼卿輩、豈不足垂世哉。

○宋の費袞『梁谿漫志』卷八

予近見子美墨蹟一卷、皆自書其所作詩、行草爛然、龍蛇飛動。

○宋の黃庭堅『宋黃文節公全集・正集』卷二七「跋舅氏李公達所寶二帖」

蘇子美似古人筆動。

○宋の劉敞『公是集』卷二三「周鄰幾伯鎮觀祕閣壁上蘇子美草書」

浮世功名均夢寐、平生翰墨獨光輝、壁間數字龍蛇動、神物通神亦恐飛。

○宋の王偁『東都事略』

舜欽尤長於古文、歌詩、行草、士大夫收之、以爲墨寶。

○宋『皇宋書錄』卷中所引『晁氏讀書記』

舜元工草隸。舜欽善草書、酣醉筆爲人所傳玩。

○元の王恂『秋澗先生大全文集』卷七一「跋蘇子美千文帖」

長史顛草、點畫略具、意度已足、子美迫近之。此帖豪放飛動、所謂筆陳堂堂者乎。歐公於本朝書、獨取蘇、蔡三人、非虛言也。周越輩安得窺其藩籬哉。

○元の陶宗儀『書史會要』卷六

蘇舜欽の書の評價をめぐって（大森）

工行草、用筆沈著不凡、端勁可愛、評書之流謂入妙品。當時殘章片簡、傳播天下。

○明の吳寬『匏翁家藏集』卷五三「跋蘇子美草書老杜絕句」
翁晚寓蘇州、其手蹟絕少、雖予蘇人亦未嘗見其書也。…然翁之妙處未可輕論、所謂惟觀其深者知之。

蘇舜欽の書を低く評價するものは次の通りである。

○宋の蘇軾『蘇軾集』卷一五

顛張醉素兩禿翁、追逐世好稱書工。何曾夢見王與鍾、妄自粉飾欺盲聾。有如市倡抹青紅、妖歌嫚舞眩兒童。

○宋の胡仔『苕溪漁隱叢話後集』卷三二

此三人亦近世能書者、恨未盡見之、獨見子美所書岳陽樓碑、雖清瘦勁健、然乏風韻、餘不甚喜之。

○宋の米芾『寶晉英光集』補遺

蘇舜欽如五陵少年、訪雲尋雨、駿馬青衫、醉眠芳草、狂歌院落。

○宋の朱熹『朱子語類』卷一四〇

今人喜蘇子美字、以曼卿字比之、子美遠不及矣。

○宋の張耒『明道雜誌』

舜欽名籍甚、才翁人少稱之。然才翁書字、清勁老健、實過

子美。

○宋の蔡襄 都玄敬『寓意錄』所引

如蘇子美、周越、近世如吳說輩、皆不免於俗。

蘇舜欽はとくに草書に優れ、兄の蘇舜元とともに並び稱され、傳世の作品には「今春帖」「留別王原叔古詩帖」などがあり、停雲館法帖に見られる。明の王世貞などは「公得勁而微病疏、山谷取態而微病緩。公勁在筆中、山谷勁在筆外」(『弇州山人稿』)と評して、とくに優劣を付けておらず、評價を一覽すると褒貶入り混じり、各人の書の好みの違いを考えればむしろ當然のことと言える。

例えば、『後村先生大全集』卷一〇二「蘇翁二帖」に「二蘇草聖、獨步本朝。裕陵絶重才翁書、得子美書輒棄去。書家謂才翁筆簡、惟簡故妙」とあるように、神宗は兄舜元の書を舜欽よりも高く評價していたようである。これに關して、神宗の書に對する鑑識の高さをも示すエピソードが董史『皇宋書錄』に見える。

元豐年間に、舜元の子の蘇澥が神宗に父の書を收藏しているかどうか尋ねられたところ、家藏していないにもかかわらず、あると答えてその場を凌いだ。あわてて親類縁者を訪ね

求め、それを神宗に差し出したが、實はそれが父の舜元の字ではなく蘇舜欽の字であったことが見破られた。

『後村先生大全集』卷一一〇「蘇才翁二帖」にも「才翁兄弟皆以書名、然裕陵尤重才翁而抑子美。今觀才翁帖、自負得二王意、謂子美有懷素風爾、乃知裕陵聖鑑之爲確論」とあり、劉克莊は神宗の評價を正論と見做している。舜欽の書に懷素の書風が見られるところがマイナスの評價の要因になつていたと考えられる。蘇軾もまたその書を低く評價しており、同じく張旭、懷素に學んだ點をマイナスの要素として捉えたのであろう。

一方、黃庭堅は草書を學ぶにあたり、初めは周越を師としたが、俗氣を取ることができなかつたので、後年には蘇舜元、舜欽兄弟の書から古人の筆意を悟つた。その後には張旭、懷素、高閑の墨蹟に觸發されて筆法の妙をたゆまず研究し、圓熟の境地に達した。

總じて見れば、蘇舜欽の書が古法を有している點や筆法に躍動感がある點が、高く評價される要素であり、一方では周越や狂草に代表される張旭・懷素に學んだ部分をいかに評價するかが、個人的趣向に基づく褒貶の分かれ目であると考えられる。

次いで書の評價との關連からも、まず歐陽脩の蘇舜欽の詩文に對する評價が、文藝批評史において、どのように位置づけられるのかを概観しておきたい。

周義敢・周雷『蘇舜欽資料彙編』七頁の解説に據つてまとめると、おおむね以下の三つに分類できる。一は蘇舜欽と梅堯臣が比肩し、宋詩に新生面を開いたとするもの。これ歐陽脩『六一詩話』に始まり、「子美筆力豪雋、以超邁橫絕爲奇、聖俞覃思精微、以深遠閒淡爲意、各極其長、雖善論者不能優劣」とある。二は、蘇舜欽と梅堯臣ともに優れていないと評價するもの。例えば、宋祁『宋景文公筆記』に「自仁宗天聖以來、惟晏殊、錢惟演、劉筠能詩、蘇梅等人自稱好爲師、但不是名家」とある。李商隱の華美にして彫琢を凝らした詩風に倣う西崑派の基準に依據しているために、錢惟演、劉筠を推賞していると考えられる。晏殊については詩文集に現在傳わらないが、百首餘りの詩が現存するが、その多くは應制の詩である。また、清の洪亮吉『北江詩話』には「歐陽公善詩而不善評詩、如所推蘇子美、梅聖俞、皆非冠絕一代之才」とある。そのほか、朱庭珍『筱園詩話』、李慈銘『越縵堂詩話』もこの説に與している。三は、蘇舜欽は梅堯臣に及ばないとするもの。『東軒筆錄』十一に引く魏泰の言に「梅堯臣作詩、

蘇舜欽の書の評價をめぐつて（大森）

務爲清切閒淡、近代詩人鮮及也」とあり、後世、明清の少なからぬ學者がこの魏泰の説に従う。⁽²⁾

このように、蘇舜欽の詩文を優れたものとして評價したのは歐陽脩に始まり、後世の評價も視野に入れれば、歐陽脩の評價は際立つて高い印象を受ける。『蘇氏文集』序にも「子美之齒少於予、而予學古文、反在其後：子美爲於舉世不爲之時、其始終自守、不牽世俗趨舍、可謂特立之士也」と見え、當時の詞藻華麗な「時文」に異を唱え、古文・歌詩を倡導する文章觀において共通していたことが、かく評價された理由の一つであろう。

書に眼を轉じれば、歐陽脩以前の宋代の文集において書に論及するものが寥々たる情況にあるなかで、具體的に蘇舜欽の書を論じ高く評價したものは歐陽脩が始めであると言つてよい。彼が「自蘇子美死後、遂覺筆法中絶」（「蘇子美蔡君謨書」と感慨をもつて評するところには、詩文における評價のあり方と相通じるものがあるように思われる。それは詩文において古文を、書法においては古意を重んじる點にある。また、その評價はある意味において衆目の認めるところであったと言うよりは、むしろ歐陽脩自身の價值基準にもとづくものであつたと言つてもよいかもしれない。

歐陽脩の評價は當時廣く知られていたようで、魏泰『東軒筆錄』卷十一に次のようにある。

(蘇舜欽)嘗曰、吾不幸、寫字爲人比周越、作詩爲人比梅堯臣、良可嘆。蓋歐陽公常目爲蘇、梅耳。

蛇足ながら、蘇舜欽自らが、書において周越に、詩において梅堯臣に比較されることに深く恥じていたことは興味深い。これについて、王士禎は『居易錄』卷二五に「此言妄矣、文人相輕習氣自古而然」と言い、魏の文帝『典論論文』の句を引いて、古より變わらぬ文人氣質に起因するものであると指摘している。

さらに、『歐陽文忠公集』(以下『歐文集』と略稱する)卷一三〇に收められる「筆說」「試筆」には、儒學や詩に關する事柄なども多く含まれ、書についての專論ではないが、歐陽脩の書法觀を窺う上でも重要な資料となつてゐる。文學との關連で言えば、周知のように歐陽脩には『六一詩話』があり、短い序文に「居士退居汝陰、而集以資閑談也」と言い、雅集など社交の場で語り合われた肩肘張らぬ内容がもとになつてゐると想定される。この「筆說」「試筆」に序文は附されてゐないが、思いつくままに綴つた隨筆風の文章であることから、『六一詩話』と共通する執筆の姿勢が見られ、筆者の隠さぬ眞

情が投影されてゐると考えても差し支えないだろう。

『六一詩話』には梅堯臣に關する記事が最も多く八條あり、ついで蘇舜欽に關する記事が二條見える。なかでも、蘇舜欽の言として引かれる「明窗淨几、筆硯紙墨、皆極精良、亦自是人生一樂」(『學書爲樂』)は、文人の理想を象徴したものとしてよく知られる。「筆說」「試筆」には同時代の書人として李建中、蔡襄、蘇舜欽の名が見え、蘇舜欽に至つては用筆法や彼の書論に及んで紙幅が割かれ、リアリティーのある筆者の口吻を以て記されている。例えば、「蘇子美論書」には、蘇舜欽は好んで用筆を論じてゐるが、その書は理論には及ばないと批評し、「用筆之法」には彼の用筆が柳公權の法であることなどが述べられてゐる。

以上の内容からすると、歐陽脩が蘇舜欽の評價にどれほどの影響力を及ぼしたかについては推測の域を出ず、上に引用した『東軒筆錄』などの記事からその一端を窺うにとどまるが、少なくとも歐陽脩が彼の詩文や書に對して如何に高い關心を持つていたかはよく理解されよう。

(四)

嘉祐年間における書壇の情況を窺える記述が、「蘇子美蔡君

謨書」(『歐文集』卷一三〇「試筆」)に見える。⁽³⁾

自蘇子美死後、遂覺筆法中絶。近年君謨獨步當世、然謙讓不肯主盟。

蘇舜欽亡き後、蔡襄は「主盟」になることを歐陽脩に勧められるも、謙讓して引き受けなかつたことを述べる。この資料について、曹寶麟氏は『中國書法史 遼宋金卷』五二頁に論じ、嘉祐六年(一〇六一)に書かれたものであると推定している。この時期の書壇における歐陽脩の影響力の大きさが窺える。つづいて、この歐陽脩の發言に關し、

是年夏天蔡襄自泉州抵京莅三司使任、所以歐公提議蔡襄「主盟」、正與此時得勢的慶曆新政主將間相互汲引和推重的背景有關。

と述べる。具體的には、歐陽脩は嘉祐五年(一〇六〇)十一月樞密副使に任命され、翌年閏八月に參知政事となり、この後治平四年(一〇六七)に下野するまでの期間、政治の表舞臺で活躍することになる。歐陽脩がこの期間に行動を共にしたのは、慶曆の新政をとともに進めた韓琦、富弼といった氣心が知れた者たちであり、蔡襄に「主盟」になることを勧めたこと背景には、彼らの強い結びつきを有していたことを言うのである。嘉祐六年の夏には蔡襄は泉州より都に戻っている

蘇舜欽の書の評價をめぐって(大森)

ので、歐陽脩は彼に直に面會してこの話を持ち出したと考えられる。

さらに、曹氏は、嘉祐年間(一〇五六—一〇六三)は歐陽脩の生涯における役人生活のなかで最高潮に達した時期であり、文壇の指導者として権力と威望とによつて如何なることも思い通りにすることができたと論じる。その根據として、何度も科擧に落第し布衣の身分であつた蘇洵を力の限りを盡くして引き上げたり、知貢擧の時代に蘇洵の二人の息子である蘇軾と蘇轍および曾鞏らを及第させたり、王安石もまた小役人であつた頃に曾鞏を介して歐陽脩の知るところとなり、その聲價を高めたことなどを擧げる。東英壽氏も『歐陽脩研究』三八二頁において、「權知貢擧となつた嘉祐二年(一〇五七)の科擧において、當時まったく無名であつた蘇軾・蘇轍兄弟や曾鞏らを世間の反發を買いつつも及第させ、その結果蘇軾らは官界に飛翔し、また王安石にも目を掛け官界で推擧するなどしており、従つて彼らはいずれも歐陽脩によつて官界への足がかりをつかんでいたのである」と述べる。⁽⁵⁾

それでは、蘇舜欽の存命中は、どのような情況にあつたのであろうか。再び上述した「蘇子美蔡君謨書」に戻れば、蘇舜欽の死によつて筆法が途絶えたことに言及するのみで、殘

念ながら、それ以上の書壇での様子を詳しく知ることはできない。この發言の推定時期は、蘇舜欽が逝去してからすでに十二年が経ており、蘇舜欽の活躍した時期と考えられる慶曆年間に歐陽脩が書壇においてどのような立場にあつたのかを窺うことは難しい。

試みにまず慶曆年間における政界での情況を見ることにしよう。

慶曆の新政の一政策として行なわれた科擧改革については「精貢擧」が奏上された。これは名目上、當時參知政事の任にあつた范仲淹とその門下の計九人によつて合奏されたものであるが、事實上この部分は歐陽脩によつて執筆されている。また、小林義廣氏は『歐陽脩 その生涯と宗族』一一〇頁に「歐陽脩も新政において、官僚の査察を率先して主張した一人である。彼は諫官であつたが、諫官はこの時期、官界の世論を代弁し、實際の政策決定に大きな影響力をもつていたのである」と述べる。

かく見てくると、件の科擧改革に關する上奏文は、もちろん范仲淹をはじめとしたグループ内の合意をもとに上奏されたものには違いないが、歐陽脩は當時諫官という低い地位にあるものの、少なくとも世論の意思形成に何らかの役割を

果たしたことは間違いないだろう。

また文壇に眼を轉じれば、寶元二年（一〇三九）に作つた梅堯臣への詩である「答梅聖俞寺丞見寄」（『歐文集』外集卷三）に「文會忝予盟、詩壇推子將」と述べ、早くも歐陽脩自身が文會において盟主であることを大膽に表明している。しかし、當時歐陽脩がまだ三十二歳であつたことを考えれば、この發言の信憑性は親友への詩であることから多少割り引いて考える必要があるかも知れない。また、この發言の大膽さは彼の性格に基づくものではないかとも考えられる。

たとえば、明道二年（一〇三三）歐陽脩が二七歳の時に「上范司諫書」（『歐文集』居士外集卷一六）をしたため、當時諫官であつた十歳も年上の范仲淹に對して、職務に忠實でないことに反省を求める書簡を送つたこと。『澠水燕談錄』卷四に、新進官僚として過ごした洛陽在任期間に、長官の錢惟演から職務を疎かにしたかどで注意を促されたところ、逆にやり込めたエピソードが見られることから、歐陽脩の不羈奔放にして鼻っ柱の強い性格が知られるからである。

しかしながら、結局のところ、書壇の情況を語る直接の證言が檢し得ない以上、當時まだ三十數歳の歐陽脩が蘇舜欽の書の評價に決定的な影響を與えるほどの力を持ちえたのかど

うかは、疑問とせねばならないだろう。

(五)

歐陽脩は蘇舜欽との親交が深かったがゆえに、彼の遺稿を整理し『蘇氏文集』十巻を編み、併せて「蘇氏文集序」及び「湖州長史蘇君墓誌銘」を書いた。「蘇氏文集序」(『歐文集』巻四二)に

頼天子聰明仁聖、凡當時所指名而排斥、二三大臣而下、欲以子美爲根而累之者、皆蒙保全、今並列於榮寵。雖與子美同時飲酒得罪之人、多一時之豪俊、亦被收采、進顯于朝廷。而子美獨不幸死矣。豈非其命也。悲夫。

とあり、蘇舜欽及びその關係者を退けたものは今恩寵に浴し、蘇舜欽とともに宴に同席し罪を得た多くの俊英たちも朝廷に返り咲いている。ひとり蘇舜欽のみ不遇にして死んでしまったことに對する憤懣の情が表れている。「與章伯鎮」(『歐文集』書簡四)にも「交朋淪落殆盡、存者不老則病、不然困於世路、愁人愁人、就中子美尤甚、哀哉。祭文讀之、重增其悲爾」とあり、そのほか「祭蘇子美文」(『歐文集』巻四九)などにも、今は亡き蘇舜欽に對する歐陽脩の深い想いが窺われる。

また、「題蘇舜欽書後」(『歐文集』補遺)に

蘇舜欽の書の評價をめぐって(大森)

子美可哀、吾恨不能爲之言、子美可哀、吾恨不能言。

といい、當時、歐陽脩は河北按察使の外任にあつて朝廷を離れていたため辯護することができなかったことを残念に思う心情が吐露されている。これは、その頃蘇舜欽が歐陽脩宛に二度にわたり送った手紙をふまえての心情であつたと推察される。處分が下された慶曆四年(一〇四四)十一月直後に書かれた二度目の手紙は、蘇舜欽の眞情を知るうえでも重要な資料である。しかし、この書簡は歐陽脩が彼の死後四年に編集した『蘇學士文集』に載録されておらず、費昶『梁谿漫志』巻八にその全文を見ることができるといふ。その理由について、費昶は

其得罪在慶曆四年之十一月、時歐陽公按察河北、子美貽書自辯于公、詞極憤激、而集中不載、今錄于此以補史所遺者云。

と述べ、この手紙の言辭があまりにも憤激したものであることを理由としており、人目に觸れることが歐陽脩自らの立場を揺るがすことにもなりかねない、編集當時の政治的動向を考慮しての處置であつたのかもしれない。書簡には、公金を利用して役所の酒宴の費用に充てるのは、他の役所においても習慣化している實態が述べられ、自分だけでなくほかの人々

をも巻き込んで罪を受けるに至ったことに對する憤り、朝廷にあつては誰一人として辯護してくれるものがいなかったことが告白されている。⁽⁷⁾やはり、蘇舜欽にとって歐陽脩はすべてを受け入れてくれる無二の親友であり、書簡の口吻より兩氏の交遊の深さが傳わってくる。蘇舜欽が直接の交遊關係をもつ人物のうちで、文獻資料を見る限りに於いて歐陽脩と詩文を最も多く應酬していたこともその證左とならう。

(六)

本節で注目したいのは、雅會など文人達の社交の場が媒介となつて、様々な情報が傳播し、それが個人の評價に、あるいは文人集團及びその流派の形成にも大きな影響をもたらしたと考えられることである。

雅會の様子について一例を挙げれば、胡仔『茗溪漁隱叢話前集』卷三四に『漫叟詩話』を引いて、

荆公嘗在歐公坐上賦虎圖、衆客未落筆、而荆公章已就、歐公亟取讀之、爲之擊節稱嘆、坐客擱筆、不敢作。

とあり、王安石が一番早く虎圖と題する詩を賦したところ、歐陽脩はそれを膝を打って賞賛したため、一同恐れ入り筆を置いた記事が見える。

北宋の文人集團の雅集の情況について、熊海英氏は『北宋文人集會與詩歌』二頁において王水照氏の見解にもとづき、天聖景祐年間、および錢惟演の西京留守在任期間に、歐陽脩、梅堯臣らの洛陽文人集團によつて雅集が催されたこと。嘉祐二年歐陽脩が知貢舉に任じられてから、科舉に應試する文人集團との交遊を結んだこと。元祐年間の蘇軾とその門下、および王洙、米芾らが詩文を應酬し書畫を品評および鑑賞したことを擧げる。⁽⁸⁾

北宋期において文人たちは雅集の參加を通じて、文學、藝術の創作および品評から政治、哲學の議論に至るまで幅廣く行なわれ、意氣投合するもの同士が友誼を深めるとともに互いの結びつきを強め、人的ネットワークを形成していったと考えられる。それゆえに、文學、藝術、政治が分かちがたく結びついてゐる當時の情況をふまえたうえで、考察を加える必要がある。當然のことながら、娛樂を伴う遊戯や酒といったものもこのような社交の場に彩を添えていたであろう。

前述した書の評價を一覽すると、當時の蘇舜欽の書が巷間において好評を博していたことを述べる記事が少なくない。そのほか、「湖州長史蘇君墓誌銘」(『歐文集』卷三一)に「又喜行草書、皆可愛、故雖其短章醉墨、落筆爭爲人所傳。天下

之士、聞其名而慕、見其所傳而喜」、『宋史』蘇舜欽傳に「爭爲人所傳、及謫死、世尤惜之」と見え、多くの時の俊英たちとの交遊を通じて、名聲を高めていったと考えられる。なかでも、『澗水燕談錄』卷六には「政成、重修岳陽樓、屬范文正公爲記、詞極清麗。蘇子美書石、邵餗篆額、亦皆一時精筆。世謂之四絶云」とあり、慶曆四年春に滕宗諒が岳州に流され岳陽樓を改修した際に、范仲淹に頼んで有名な「岳陽樓記」を書いてもらう。これを書寫したのが蘇舜欽であり、慶曆年間には四絶の一人に數えられるほどであった。

また、記事によつては蘇舜欽の墨蹟について「手蹟絶少」「遺蹟之少」などと言うものもあるが、これについて、文徵明は「題蘇滄浪詩帖」(『甫田集』卷二三)に、彼が蘇州に居た四年間に流傳した墨蹟は多く、それらは『宣和書譜』にも見え、「斷章片簡」と言つても、天下に廣まっていたわけであるから、當時入手することは難しくなかつたはずであると疑問を呈している。

當時譽れ高い蘇舜欽が世間に大きな影響力を持つていたことを語るユーモラスな記事が、『後村先生大全集』卷一〇四に見える。

蘇子美が「贈秘演詩」に「賣藥得錢祇沽酒、一飲數斗猶惺

蘇舜欽の書の評價をめぐつて(大森)

惺」と詠んだところ、僧侶である秘演はこの句を塗り消した。それに立腹した舜欽に對して、秘演は「公詩傳萬口、吾持戒不謹、已爲浮屠罪人、公又從而暴之乎」と言つた。秘演は自らの酒豪ぶりを、詩をもつて鳴る蘇舜欽に詠まれることで、僧侶の身でありながら教戒を守っていないことを世間に知られることに恐れを感じたのである。このような記事からは、當時の文人同士のやりとり、風評の傳達の様子が窺われて興味深い。

(七)

蘇舜欽の收藏家としての側面も、時の名士たちとの交友を考へる上で無視することはできない。

清の乾隆帝が王獻之の「中秋帖」、王珣の「伯遠帖」とともに珍藏し、その室を三希堂と名づけたことで知られる「快雪時晴帖」も、宋代には蘇易簡の所藏となつた。『寶晉英光集』卷七に次のようにある。

予在都下、以好玩十種易于蘇太簡祕書激、字志東。一日、駙馬都尉王晉卿借觀、求之不與、已乃翦去國老署及子美跋、著于模本、乃見還。

これには蘇舜元、舜欽兄弟の跋があり、蘇耆の押署と蘇舜

欽の跋文は切り去られ、模本につけられたという。米芾は元豐七年（一〇八四）に舜欽の子激からこの帖を手に入れていゝる。蘇氏一族と交際し、多くの名蹟を入手しており、『寶章待訪録』には、『歷代名畫記』の著作で知られる唐の張彥遠に匹敵するものとして、蘇舜欽の鑑識の高さを稱えている。

そのほか、内府に收藏された李邕の眞蹟とされる「大照禪師碑」は、冒頭の失つた五行を後に蘇舜欽が補寫している（王士禎『居易錄』卷二九）。また、「瘞鶴銘」の作者について、歐陽脩は唐の顧況に擬し、蘇舜欽は王羲之⁽⁹⁾と言ひ、褚遂良の臨する『蘭亭序』も蘇舜欽の所藏であつた（桑世昌『蘭亭考』）。

當時の文人たちは高尚にして好奇に富む氣風のなかで、様々なことを語り、互いの親交を深めていった。宋詩に書畫文房を介した文人達の交流が多く讀み込まれるようになったことも、それをよく示している。たとえば、梅堯臣「同蔡君謨江鄰幾觀宋中道書畫」には、蔡襄、江休復とともに今は亡き收藏家の宋中道の邸宅に集い、貴重な書畫の眞蹟の數々を目睹した際に、場に居合わせた者達が江休復の詳細な鑑定に驚き、蔡襄の素早く書き上げた臨摹の眞に迫る様子をリアルに描いている⁽¹⁰⁾。

歐陽脩は、金石學の創始者として金石の遺文や石刻の拓本

を蒐集して研究し、『集古錄跋尾』十卷を撰したことも知られる。蔡襄は歐陽脩家藏の書物に關して目錄の整理をゆだねられ、また集古錄序文の揮毫を頼まれるなど、歐陽脩の鑑識のよき助言者であり、鑑定に際し二人はしばしば互いに議論を戦わせた。書畫に關する歐陽脩と蘇舜欽との直接のやりとりを、歐陽脩の文集にある集古錄跋尾などにも窺うことはできないが、おそらくは、それらの鑑定について語り合うことも少なくなかつたであろうと推測される。

收藏家としての蘇舜欽を語るうえで見逃すことができないのは、懷素「自叙帖」である。眞蹟とされるものが宋代には三本あり、曾紆の跋によれば、一つは蘇舜欽が收藏していた。その前六行を補寫したのが蘇舜欽で、子の泌がこれを所藏していた⁽¹¹⁾。これについて米芾『書史』に次のように言う。

懷素自叙眞蹟在蘇泌家、前一幅破碎不存、其父集賢校理舜欽自寫補之。

ところで、「自叙帖」を補寫せんとしたのはどのような動機によるものだったのだろうか。それを考える手がかりとして、蘇舜欽の酒豪ぶりに注目してみたい。秘演なる人物とも酒友の交わりがあつたことをすでに述べたが、元の陸友仁『研北雜志』「讀書佐酒」には、次のようなユーモアを含んだエピソード

ソードが記されている。ついでに言えば、祖父の蘇易簡は酒に溺れて亡くなっている。

蘇舜欽は性格が豪放不羈で、酒を好んだ。舅の杜祁の家にいる時は、毎晩讀書をしながら、一斗の酒を飲むのがならいであつた。杜衍はそれを確かめるべく、密かに子弟に偵察にやらせた。蘇舜欽はちようど『漢書』張良傳を讀んでいる最中で、「良與客狙擊秦皇帝、誤中副車」に至ると、にわかに意を得たりと「惜乎、擊之不中」と叫び、大きな碗に満たされた酒を飲み干した。また「良曰、始臣起下邳、與上會于留、此天以授陛下」に至ると、また机を叩いて「君臣相遇、其難如此」と言つて再度大碗の酒を飲み干した。この様子を聞いた杜衍は大笑いして、「そのような酒の肴があれば、酒一斗も多くはない」と言つた。

憶測を逞しくすれば、蘇舜欽が「自叙帖」を補寫した動機は、あるいは懷素の書に對する美的關心のみならず、酒を好んだ點においても懷素の生き方に共感したからではなかつたか。

『金壺記』に「懷素嗜酒以養性、草書以暢志、凡一日九醉、時人稱醉僧書或醉素」、錢起「送外甥懷素上人歸鄉侍奉」詩に「狂來輕世界、醉裏得眞如」とあり、懷素は酒を愛し、酔うと

好んで草書を書いた。酒の誘う陶酔境に入つて、はじめて獨創的な書を生むに至つたといつても過言ではないだろう。そうしてみれば、二人がともにその書を「醉書」と稱されるところにも、書藝以上のより深い處に接點があり、これこそが蘇舜欽を張旭、懷素の書に心酔させた根本的な理由であつたと考えられるのである。

(八)

書藝における蘇舜欽の才を世に知らしめたのは、歐陽脩の推賞に負うところが大きかつたのではないかという當初の想像も、歐陽脩が蘇舜欽存命中の慶曆年間の書壇における影響力について裏づけとなる確たる證據が檢しえず、推測の域にとどまることになつた。しかしながら、少なくとも文獻上、蘇舜欽の書および詩文をとりわけ高く評價したのは、歐陽脩が最初であることには疑問を差し挟む餘地はないだろう。それは、歐陽脩は蘇舜欽と深交を結ぶことを通じて、ただ書藝に優れるというだけでなく、全人的な人としてのあり方を承認した上での評價であつたと考えられる。このことは當時異論があるものの蔡襄の書を人格をも含め高く評價し、宋代第一とまで言つたのが歐陽脩であつたこととも通底する。そう

して見れば、「自蘇子美死後、遂覺筆法中絶」の言葉には、たんに書の古法が失われたことを言うにとどまらず、歐陽脩が「筆説」に「非自古賢哲必能書也、惟賢者能存、其餘泯泯不復見爾」というように、歐陽脩の蘇舜欽の爲人に對する深い思いが込められているのではないだろうか。それには兩氏の深い交遊が根底にあつたことは改めて言うまでもない。

かく見てくると、宋代より個性を標榜する書が重んじられるようになるに伴い、その評價も複雑な様相を呈することとなつた。それ故に、書の評價のありかたを説明するためには、この入り組んだ社會の諸相と文化のありかたに對して、狀況に則して適宜判斷を加えながら解きほぐしてゆくほかはないと考える。とくに交遊關係と書の評價の關係において、圖式的に明確に相互の對應が示されるわけではないので、その間隙を埋める方法を模索しながら實像に迫ることが今後の課題である。

注

(1) 蘇舜欽が滄浪亭を築くに至つた経緯と彼の事蹟については、福本雅一「滄浪亭と蘇舜欽」(『國學院大學紀要』卷三六、一九九八年)に詳しい。そのほか、福本雅一監修『中國文人傳

第三卷 宋一(藝文書院・二〇〇六年)藤原有仁譯注「蘇舜欽」の項も参照。

(2) 周義敢・周雷『蘇舜欽資料彙編』(中華書局・二〇〇八年)。

(3) 『歐文集』外集卷二三「跋永城縣學記」にも「蓋久而得三人焉、響時蘇子美兄弟以行草稱、自二子亡、而君謨書特出于世」とある。

(4) 曹寶麟『中國書法史 遼宋金卷』(江蘇教育出版社・一九九九年)。

(5) 東英壽『歐陽脩研究』(汲古書院・二〇〇三年)。

(6) 小林義廣『歐陽脩 その生涯と宗族』(創文社・二〇〇〇年)。

(7) 須江隆「慶曆黨争考—蘇舜欽書簡を中心に—」(『集刊東洋學』所收・中國文史哲研究會・一九九六年)には、蘇舜欽の書簡を通じて、高いエリート意識を持った館閣集團と實務官僚の御史を中心とした集團の對立という新しい視點から慶曆時代の黨争に考察を加えている。

(8) 熊海英『北宋文人集會與詩歌』(中華書局・二〇〇八年)。

(9) 盧憲等『嘉定鎮江志』卷六に「瘞鶴銘、華陽眞逸撰。…此銘相傳爲王右軍書。蘇子美詩、山陰不見換鶯經、京口新傳瘞鶴銘。文忠以爲不類王法、而類顏魯公、又疑是顧況道號」とある。因みに、銘中に「華陽眞逸撰」の字句があることから、翁方綱や楊守敬はそれに従っている。

(10) 梅堯臣「同蔡君謨江鄰幾觀宋中道書畫」(『宛陵先生集』卷一三)に「鍾王眞蹟尙可睹、歐褚遺墨非因模、開元大曆名流夥、一一手澤存有餘、行草楷正大小異、點畫勁宛精神殊。坐中

鄰幾素近視、最辯纖悉時驚吁。逡巡蔡侯所得、索觀鋪紙纒須
與、一掃一幅太快健、檀溪躍過瘦的顛。觀書已畢復觀畫、數軸
江吳種稻圖」とある。

(11) 中田勇次郎編『書道藝術 第五卷』(中央公論社・一九七六
年) 参照。

蘇舜欽の書の評價をめぐる(大森)